

エキノカクタスの育て方

Echinocactus

サボテン科 / Cactaceae

黄金の刺が彫刻的な球体を飾る「サボテンの王様」。発芽率が高く実生入門にも最適。夏型で丈夫なエキノカクタス属の代表種です。

基本データ

🌱 成長期

夏型（春～秋生育、冬は休眠）

🌡️ 耐寒温度

最低5℃が目安（園芸情報）

☀️ 日照

日なた（小苗は真夏に遮光を検討）

📅 播種適期

5～6月（加温があれば年中）

🕒 発芽日数

25～30℃で1～3週間（温度依存）

📍 主産地

メキシコ中部（ケレタロ州～イダルゴ州ほか）

📏 難易度

概要・魅力

エキノカクタス属（Echinocactus）は、メキシコ中部～北部から米国南西部にかけて自生するサボテン科の一属です。なかでも代表種の金鯧（きんしゃち）は、整然と並ぶ21～35本の稜（りぼ）と輝く黄金色の刺をまとった球体が「サボテンの王様」と称されるほどの存在感をもちます。最大直径80cmを超え、高さ1m以上に育つ大型球サボテンとして、日本で最もポピュラーな球サボテンのひとつです。英国王立園芸協会（RHS）のAward of Garden Merit（優良庭園植物賞）を受賞していることも、世界的な人気の高さを物語っています。

流通名は Echinocactus grusonii Hildm.（1891年記載）ですが、近年の分子系統学的研究により、金鯧は Kroenleinia grusonii という独立した属に移行する見解が提唱されています。また、狭義のエキノカクタス属は大竜冠（E. platyacanthus）や太平丸（E. horizonthalonius）などを中心とする小さな属として整理されつつあります。ただしすべての分類機関がこの変更を採用しているわけではなく、園芸界では引き続き Echinocactus grusonii・エキノカクタス属の表記が主流です。本ガイドでもこの慣例に従います。

金鯧の自生地はメキシコ東中部の主にケレタロ州～イダルゴ州に分布する固有種で、標高1,400～1,900mほどの火山性岩場の急斜面、排水性が極めて高い環境に生育します。野生個体群はダム建設による生息地の水没などにより大きく減少していますが、現在の流通株はほぼすべて栽培繁殖由来です。

エキノカクタス属の主な種はそれぞれ異なる魅力をもちます。

- **金鯧（E. grusonii）**：球体直径80cm超・高さ1m以上に達する大型種。黄金色の刺が整然と並ぶ姿が圧倒的な存在感。実生入門にも最適な人気筆頭種。白刺の変種も流通する。
- **大竜冠（E. platyacanthus）**：球サボテン最大種のひとつ。メキシコでは「ビズナガ」として食用に使われてきた歴史をもつ、存在感のある大型種。

- **太平丸（E. horizonthalonius）**：米国南西部～メキシコ北部の乾燥地帯に自生。ピンク～赤紫色の花を咲かせる渋い魅力をもつ中型種。

エキノカクタスが選ばれる理由はその姿だけではありません。球サボテンのなかでも発芽率が高く実生がしやすいため、種まきのはじめの一步として多くの愛好家が金鯧から始めます。サボテン科全般と同様に夜間に気孔を開いてCO₂を取り込むCAM型光合成を行い、乾燥環境への適応力が高いことも扱いやすさにつながっています。栽培環境でも40～50年以上を生きる長命な植物で、毎年少しずつ大きくなっていく変化を長期間楽しめます。種から育てるなら、SEEDSTOCKで金鯧の種子を手に入れるところから始められます。

金鯧は実生から20年以上を経てようやく開花します。株頂に黄色い花を咲かせる光景は長期育成の証。種から育て上げた株が花をつけたときの感動は格別です。

☀️ 置き場所

エキノカクタスは日当たりと風通しのよい場所を好みます。日照が足りないと球体が縦方向に伸びる徒長を起こし、稜と刺が貧相になります。原産地の強光線に準じた管理が基本ですが、株のサイズや室内外への移行タイミングには配慮が必要です。

春（3～5月）

気温が安定して10℃を超えてきたら、日当たりよく風通しのよい戸外へ移動します。冬の間に室内管理していた場合は、**1～2週間かけて徐々に直射日光に慣らす**ことが大切です。急な強光への移行は日焼けの原因になります。

夏（6～9月）

生育期の本番です。直径10cm以上の大型株は直射日光下でそのまま管理できます。ただし直径10cm未満の小苗は真夏の強光線で日焼けを起こすことがあるため、遮光を検討しましょう。梅雨期の長雨・過湿は根腐れの原因になるので、雨の当たらない軒下などへ移動することをおすすめします。

秋（10～11月）

気温が下がるにつれて徐々に水やりを減らします。最低気温が10℃前後になったら室内取り込みの準備を始めましょう。

冬（12～3月）

休眠期。室内の南向きの明るい窓辺で管理します。最低温度は5℃以上を保つことが目安です。冬季室温10～12℃でゆっくり休眠させると、翌年の刺が太く育ちやすいとされます。日照が不足がちなので、可能な限り日当たりのよい場所を確保しましょう。

耐寒温度は園芸情報では最低5℃が目安です。用土が完全に乾燥した状態であれば短期間の低温にはある程度耐えますが、種や個体・管理状態によって差があります。湿った状態での低温は根腐れを招くため、冬の水やりは極力控えましょう。

水やり

エキノカクタス栽培で最も多い失敗が水のやりすぎによる根腐れです。CAM型光合成で乾燥環境に適応しているぶん過湿への耐性は低く、「少なめかな？」と感じるくらいがちょうどよいです。「乾かしてからたっぷり」のメリハリを意識しましょう。

生育期（4～9月）

用土が完全に乾いたのを確認してから、鉢底から流れ出るまでたっぷり与えます。目安は春・秋が10～14日に1回、夏盛りが7～10日に1回程度です。水やりは株の頂部（頭）に水がかからないよう株元に注ぎます。刺座に水が溜まると頂部が腐敗しやすくなります。真夏に気温35℃を超える場合は、朝か夕方の涼しい時間帯に行いましょう。

秋以降（10～11月）

気温の低下とともに徐々に水やりの頻度を落とします。10月は10～14日に1回、11月は14～20日に1回を目安に間隔を広げ、冬の断水に向けて体を慣らします。

冬（12～2月）

断水か、暖かい日の午前中に月1回程度の少量を与えます。どちらが適切かはお住まいの地域・室温・株のサイズによって異なります。室内が温かく乾燥気味の環境では月1回少量の給水が安心です。低温＋過湿の組み合わせが根腐れの最大リスクです。

肥料

自生地の痩せた岩場土壌に合わせ、肥料は控えめが基本です。生育期に薄めた液肥を月1～2回、または植替え時に緩効性化成肥料を少量用土に混ぜる程度にとどめましょう。

迷ったら「もう少し待つ」が安全です。鉢を持ち上げてみて軽く感じるようになったら水やりのタイミングの目安です。完全に乾燥した用土はさらさらと軽くなります。

用土・植替え

エキノカクタスには排水性に優れた用土が必須です。自生地の火山性岩場の環境に近い、水はけのよい配合にすることで根腐れを防ぎます。根は浅く横に広がる性質があるため、鉢の形にも配慮しましょう。

用土の配合例

- 手軽な方法：市販のサボテン・多肉植物用培養土をそのまま使用。
- 自家配合（基本）：赤玉土（中粒）5 + 軽石（中粒）3 + 川砂 2 の無機質中心配合。
- 自家配合（バランス型）：赤玉土（小粒）4 + 鹿沼土 2 + 軽石 2 + 腐葉土 2 に緩効性化成肥料を少量。

大型株は粒をひと回り大きくすると通気性が安定します。水はけが悪いと感じたら軽石の割合を増やして調整します。鉢底には粒の大きい軽石を敷くとさらに排水性が向上します。

鉢の選び方

金鯰の根は浅く横に広がる性質をもち、深い主根がありません。そのため平鉢（浅鉢）またはアザレア型の鉢が向いています。深い鉢は底部の土が湿ったまま乾きにくく根腐れリスクが上がります。現在の株より直径3～5cm大きいサイズを選び、過大な鉢は避けましょう。大型株には重心が安定する重めの鉢が実用的です。

植替えの時期と頻度

適期は4月中旬～5月（気温15℃以上が安定する春）です。梅雨入り前に完了させることが目標です。夏の高温期・梅雨・冬季は避けましょう。

- 小型株（6号鉢以下）：毎年～2年に1回が目安。根が鉢内を埋め始めたら早めに対処します。
- 中～大型株（6号超）：2～4年に1回程度で問題ありません。

植替え時は古い土を軽く落とし、傷んだ根を除去します。切り口を1～3日陰干しして乾燥させてから新しい用土に植え付けます。植え付け後は1週間は水やりせず、明るい日陰で養生してから通常管理に移行します。

発芽のさせ方

金鯰（エキノカクタス）は球サボテンのなかでも発芽率が高く、適切な温度と湿度を管理できれば初心者でも成功しやすい

い実生入門種です。SEEDSTOCKでも実生から楽しめる金鯉の種子を取り扱っています。最大の敵は過湿によるカビと低温。清潔さと温度管理が成功の鍵です。播種の適期は気温が安定して20℃以上になる**5～6月（加温設備があれば年中可）**です。

発芽日数の目安

発芽日数は管理温度によって大きく異なります。**25～30℃を維持できれば1～3週間が目安**で、30℃前後をキープできると1～2週間以内に発芽が始まるケースが多く報告されています。近縁種（大竜冠 *E. platyacanthus*）を用いた研究では最適発芽温度は25℃前後とされており、17℃を下回ったり34℃を超えたりすると発芽率が大きく低下します。一方、加温が十分でなく20℃前後の低温管理になると2～3ヶ月かかることもあります。温度の確保が成否を分ける最大のポイントです。

発芽までの手順

1. **用土を準備して殺菌する**：浅い容器（排水穴あり）に赤玉土細粒とパーミキュライトを混ぜた、カビが生えにくい無機質中心の用土を入れます。あらかじめ熱湯消毒または電子レンジ加熱で殺菌しておきましょう。古土の使い回しは厳禁です。
2. **種子を前処理する**：ベンレート水和剤（ベノミル）の1,000倍溶液に種子を30分～数時間浸漬します。カビ・立ち枯れ予防が目的です。省略可ですが、殺菌処理をするより安心です。
3. **播種する**：湿らせた用土の表面に種子が重ならないよう均等に置き、軽く押しつけます。間隔は1cm程度が目安です。
4. **覆土はしない、またはごく薄く**：サボテンの仲間の種子は光が当たらないと発芽できない**好光性種子**です。*Echinocactus* が属する *Cactaceae* 族の種子は暗黒下では発芽しないことが複数の査読研究で確かめられています。覆土はしないか、細かいパーミキュライトや砂を種子がかかるうじて隠れる程度にごく薄くまぶすのみにとどめましょう。深く埋めると発芽が妨げられます。
5. **腰水をして高湿度を保つ**：容器ごと浅い水に浸けて腰水管理にします。透明な蓋やラップで密閉し、高湿度を維持します。発芽までは乾かさないことが基本です。
6. **25～30℃の温度を保つ**：最も重要なステップです。ヒーターマットや簡易温室を活用して**25～30℃**をキープしましょう。5月下旬～6月であれば加温なしでも十分な温度が得られます。**直射日光**は避け、間接的な明るい場所に置きます。
7. **腰水を清潔に保ちながら待つ**：腰水は1～3日に1回清潔な水に交換し、藻や細菌の繁殖を防ぎます。カビが発生した種子は早めに取り除きましょう。
8. **発芽後の管理（外気に慣らす）**：発芽が揃ってきたら徐々に蓋やラップを外して**通気**を確保します。一気に外すと乾燥で苗が傷むため、段階的に慣らします。直射日光は避け、**遮光の半日陰**で管理します。腰水は発芽後1～2ヶ月は継続します。
9. **腰水から通常水やりへ移行する**：発芽後1～2ヶ月を目安に、子株が混み合ってきたら腰水を終了し、上からの水

やりに切り替えます。刺が出始めたら間引きまたは鉢上げのタイミングです。

1年目の小苗は成株と異なり、冬も完全に断水させず暖かい環境（最低8℃以上）で少量の水やりを続けると丈夫に育ちます。最初の冬を無事に乗り越えれば、その後の成長はぐっと安定します。

病害虫・トラブル

エキノカクタスは適切に管理すれば比較的丈夫ですが、**過湿・日照不足・蒸れ**が絡むトラブルが大半を占めます。早めに気づいて対処することが、美しい球体を保つ近道です。

根腐れ（最重要）

水のやりすぎと冬の低温過湿が主な原因です。球体が柔らかくなったり**株元**が変色・萎んだりしてきたら根腐れを疑います。対処は腐敗部分を清潔なカッターで切り取り、切り口を数日間乾燥させてから新しい無菌の用土に植え直します。重症になると回復が難しいため、予防が最善策です。

カイガラムシ・ネジラミ

- **カイガラムシ（コナカイガラムシ等）**：刺の根元や株の表面に白い粉状・綿状の付着物として発生します。古い歯ブラシや綿棒（アルコール含浸）で物理除去するか、**殺虫剤**を散布して対処します。梅雨前の予防散布も有効です。
- **ネジラミ（根コナカイガラムシ）**：根に白い綿状物質が付着します。植替え時に根を必ず確認しましょう。発見した場合は根を洗い流して乾燥後、清潔な用土に植え直します。

ハダニ

室内越冬中の乾燥・高温時に発生しやすいです。稜や表皮に白い点状の傷がついたら疑いましょう。一般の殺虫剤は効果が薄く、**殺ダニ剤**を使用します。屋外で水洗いするか、**湿度**を上げることで予防できます。

徒長

日照不足や水分過多により球体が縦方向に伸び、稜と刺が弱くなります。いったん徒長した部分は元に戻らないため、十分な日照と控えめな**水やり**で予防しましょう。

日焼け（葉焼け）

室内から急に屋外の強光に当たったり、小苗を遮光なしで真夏の**直射**に晒したりすると、株表面が茶褐色に変色します。傷んだ部分は回復しないため、春の外出し時は**徐々に光に慣らす**ことが重要です。

多くのトラブルの根本は「水のやりすぎ」「蒸れ・通風不良」「急な強光」です。乾かし気味・風通し

よく・段階的に光を強くする、この3つを心がけると失敗がぐっと減ります。

栽培メモ



エキノカクタスの種子を探す

QRを読み取る／seedstock.jp